

「あなたのこと、もっと知りたいな」



2年次長期研究員 山口 綾

「なぜ、この児童は対人関係でつまづくことが多いのだろう。」ある学校現場での私の思いです。その児童に対して個別指導を行っても改善する気配がなく、私自身どうすればよいか困ってしまったというのが、この研究の出発点でした。

特別支援教育には、「なぜこの子はこのような行動をするのか」と行動の背景・要因を推測するという大切な視点があります。本研究では、協力校の先生方とともに、「客観的事実」の収集と整理をした上で、背景の推測と、その背景を踏まえた支援をしていきました。教師が背景を推測することで、児童にあった関わりに気づき、それを継続、改善することにより児童のより良い変容を見ることができました。

研究全体を振り返って、私が実感したことは、「教師が、児童一人一人に興味関心をもち、観察し続けていくと、児童の行動の見え方が変わってくる」「教師自身が児童への関わり方を振り返ることで、より児童に合った働きかけ方が見えてくる」ということです。学校現場では、対人関係だけではなく、他にも特別な教育的支援を必要とする児童もいますが、教師の「観察し続ける」「児童に合った関わりとは何かを振り返る」という姿勢が、たくさんの児童のより良い変容を生んでいくのではないかと考えました。私自身も「あなたのこと、もっと知りたいな」と、一人一人の児童と関わり続けていきたいです。ご指導、ご協力いただいた先生方、本当にありがとうございました。

「できてうれしい」「できなくてつらい」という

子どもの気持ちに寄り添って



2年次長期研究員 峯 慶子

自信や意欲をなくし、授業などへの参加そのものにつまずいてしまう子どもと接していると、何とかして前を向かせたいと思うものです。しかし、子どものよさを見つけてほめれば解決するという単純な話ではありません。そこで、小学校低学年のうちから学期のはじめなどにつくる機会の多い、個人の目標に着目して研究を進めました。

研究の中で大切にされたのが、特別支援教育や心理学の文献をもとにつくった「子どもにとって何ができてうれしいのか、何ができないとつらいのか」という視点です。心が折れかかっていた子どもでも、この視点をもとに検討した目標を提案し、一緒に達成を目指していくと、徐々に前を向き始めました。決して無理のない目標でしたが、その達成に向かう過程での様々な「できた」は、子どもにとっても教師にとっても大きな喜びにつながりました。授業などへの参加そのものにつまずいていた子どもたちは今、苦手なことにも向き合い、挑戦するまでに変容しています。自信や意欲のもつ力の大きさに驚くとともに、その大切さを改めて実感することができました。

子どもが何に対して「できてうれしい」「できなくてつらい」と感じるのか。その視点で子どもとかわることに効果的な指導・支援のヒントがあり、結果的に子どものほしい言葉かけを生むということに気付くことができた2年間でした。研究の機会を与えてくださった皆様、そして研究にご協力いただいた皆様に心から感謝いたします。